

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370541

研究課題名(和文) 英語前置詞の認知意味論的分析

研究課題名(英文) A Cognitive-Linguistic Analysis of English Prepositions

研究代表者

奥野 忠徳 (OKUNO, TADANORI)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：80125517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：英語前置詞の意味に包括的かつ体系的な説明を与えることを目的として、in, on, at, toなどの英語主要前置詞の意味を認知言語学的に分析した。言葉の意味には中核があり、それ以外の意味はそこからの自然な意味拡張によって説明できるとする考えに基づき、ほぼオリジナルの資料を用いてこれら極めて複雑な意味を持つ前置詞の意味を分析した結果、前置詞の意味についての極めて包括的、体系的な分析が完成した。

研究成果の概要(英文)：This work aims to give a comprehensive, systematic account of the meanings of English prepositions including IN, ON, AT, and TO in a cognitive-linguistic framework. Based on the idea that a word has one fixed meaning in its core from which various other uses are extended in a natural way, I analyzed the very complex lexical structures of some of the main English prepositions by using almost original data. I have come up with a comprehensive, systematic picture of the meanings of English prepositions.

研究分野：英語学

キーワード：前置詞 意味 認知言語学 意味論

1. 研究開始当初の背景

英語の前置詞は、英文を書けばほぼ必ず使用されるにもかかわらず、その本格的・体系的な意味研究は皆無に近い状態である。そのために、(a)文法理論研究においては、前置詞が他の構文や規則を検証する手段(化学におけるリトマス試験紙のようなもの)として使用されることが多いが、その正確な意味も不明のまま使用されているために、完成した理論自体がその内部に脆さを内包するに至っている、(b)日本の英語教育においても、前置詞の意味については教師の直感に基づいて教育が行われており、説明も曖昧になったり、誤りが頻発しているという状況にある。

2. 研究の目的

上記のような状況を踏まえ、本研究では、英語前置詞の意味に包括的かつ体系的な説明を与えることを目標として設定した。すなわち、IN, ON, AT などのかなり基本的な前置詞の意味の全体像を体系的に分析し、それ以外の前置詞についても、これまでにないほどの精度をもって分析することを目標とした。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するための方略として、意味分析を最も体系的・網羅的に説明できる認知言語学的アプローチを採用した。すなわち、ことばの意味には中核があり、すべての用法はその中核からの意味拡張と捉える考え方である。この「中核からの意味拡張」という考え方は、名詞、形容詞、動詞などの分析には必要不可欠であるが、それを UP という副詞に適用・分析したのが Lindner (1983) であり、前置詞に適用したのが Tyler and Evans (2003) である。しかし、Tyler and Evans の理論は(a)前置詞のほんの一部の意味しか説明していない、(b)その分析よりもさらに優れた分析が可能であるという点で、まだまだ改良・修正の余地がある。本研究では、さらに多くの独自の資料を用いてその欠陥を補いつつ、新しい、包括的・体系的な理論を構

築することを狙った。

4. 研究成果

研究の初年度においては、多くの前置詞の資料収集ともに、英語前置詞 IN の意味を明らかにし、論文として発表した。それによると、IN の様々な意味は一つの中核の意味(LM が定義する空間を TR が占めている)から穏当な仕方によって拡張されていることが示された。さらに、LM によって定義される空間には3種類あり、(1)固有空間、(2)機能空間、(3)輪郭空間が認められることも示された。固有空間の例としては、例えば、粘土の塊に突っ込まれたコインのような状況が考えられる。コインは、粘土が定義する空間、つまり立方体の面によって囲まれている空間の一部を占めている。機能空間の例としては、例えば、ボウルにジャガイモが入っている例が考えられる。その場合、厳密にはジャガイモはボウルの「外」にあるのであるが、それを IN として認識できるのは、ボウルが容器という機能を持ち、容器という機能を持つものとして定義される空間をジャガイモが占めているからである。固有空間と機能空間の決定的な違いは、機能空間はその機能が果たせない場合、空間は消滅するという点である。例えば、ボウルを逆さにしてしまうととたんに IN が使用できなくなる。同様のことがテントや椅子についても言える。輪郭空間とは、草むらや木(の葉が茂っている部分)のように、類似の物体が重なるようにして存在する物に別の移動物体が収まっているような場合である。IN 自体の中核の意味は一つであるが、その意味に関してこのように3種類の様態があることが指摘されたのは本研究が最初である。本研究では、これら3様態のそれぞれからさらにメタファー化により、さまざまな IN の使用法が意味拡張されていることを明らかにした。このように、3種の空間概念を設定することにより、IN の基

本の意味から IN のもつすべての意味が拡張できることが示された。

研究の第2年度は、引き続き前置詞の資料収集とともに、英語前置詞 ON の意味を明らかにし、論文として発表した。それによると、ON の様々な意味は一つの中核的イメージから穏当な仕方によって拡張されていることが明らかにされた。すなわち、その中核的イメージとは、何かが何かの上に乗っているというイメージであり、そこから (a) 接触 (contact) と (b) 支持 (support) の意味が因数分解される。「接触」からは、線接触と面接触が分離する。線接触という意味によって、電話における ON の使用が説明されるし、さらにそこから on Google や on the Internet のような表現も説明できる。また、通常慣用句として処理されている on a trip/vacation などの表現も、この線接触という意味から説明できる可能性を論じた。面接触からは、例えば、on the program/menu や on the team/committee などの表現が説明できることを示した。さらに、通常、力は面に加えられることから、step on the brake, nibble on fruit, puff on the cigar, pull back on the stick, blow on the trombone のような極めて説明しにくい表現も明確に説明できることを示した。「支持」からは、「負担」という意味が拡張され、「負担」から「制約」「依存」などが拡張されてきたことを豊富な例で示した。以上の分析の結果、これまでに考えられてきた以上に ON の各用法は体系的であり、それらすべては中核の意味 (何かが何かの上に乗っている) ということから説明できることが示された。

研究の最終年度は、さらに引き続き前置詞の資料を収集するとともに、英語前置詞 OVER の意味分析を明らかにし、論文として発表した。OVER については、いくつかの優れた先行研究があるが、本研究では資料をほとんどす

べて独自のものを用い、それら先行研究の不備を補いつつ、独自の仮説も提案した。まず、OVER の中核的意味を静的なものと規定し、そこから一つは、TR が LM を覆っている意味が拡張される。その点は Lakoff (1987) の分析を踏襲しているが、そこからさらに進んで、今まで説明できなかった think it over のようなタイプの文も同様な説明が可能であることを示唆した。また、いわゆる「話題を表す」OVER の意味も、このような説明の延長線上にあることも示唆された。さらにもう一つ、動的な意味が拡張されたと考え、さらにその動的な意味から回転の意味が拡張されたと考えられる。OVER によって表されるのが縦回転であることもこのような拡張によって説明できる。また、縦回転であっても、軸を持つ縦回転は OVER では表せないこともこの拡張から説明できる。このように、静的な中核の意味から2つの大きな方向に拡張がなされ、そのそれぞれについて、さらに特殊な意味が拡張されたとすれば、極めて自然な形で OVER の全貌が捉えられることを示した。

本研究の全期間を通じて、以上3つの前置詞の他、次の前置詞については分析が終わり、現段階でそれぞれ次に示す状況にある。

(a) AT (2017年度中に発行予定の論文集に掲載確定) 本論文では、英語前置詞 AT の本質を論じた。一般に AT は、IN や ON と同様、2つの物体の相対的位置関係を表すものと考えられている。すなわち、2つの点とみなせる物体の位置が重なっているということを表すと考えられている。しかし、本論文では、AT をそのように捉えることは誤りであり、AT は IN や ON のような前置詞とは本質的に異なることを論じた。

(b) T0 (2017年度中に発行予定の論文集に掲載確定) 本論文では、英語前置詞 T0 の本質を論じた。T0 についても、それが移動

を表すものと考えられているが、それは誤りで、T0 自体は移動を表さず、むしろ AT と同類の前置詞であることを論じた。さらに T0 が持つさまざまな用法を意味拡張によって説明した。

(c) ABOVE, ACROSS, ALONG, BEHIND, BETWEEN, BEYOND, FOR, FROM, OF, WITH (それぞれ草稿が完成し、これから発刊に向けて準備する段階である。)

これらの英語前置詞以外についても資料収集は完了しているので、順次、論文作成に向けた準備がなされている。さらに、スペイン語の前置詞(a, con, de, en, para, por)、フランス語(à, avec, dans, de, en, par, pour)、ドイツ語の前置詞(ab, aus, auf, durch, in, mit, nach, von, zu, für、及び、格)についての資料収集もほぼ完了した。今後は、これらの言語の前置詞についても詳細な意味分析を行い、それを利用する形で、英語前置詞の意味を再び捉えなおす作業も計画している。

<引用文献>

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, The Chicago University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

発表済み論文(計3件)

奥野忠徳、OVER 再び、弘前大学教育学部紀要、査読無、114号、2015、105-113

奥野忠徳、英語前置詞 ON の認知言語学的分析、弘前大学教育学部紀要、査読無、112号、2014、71-79

奥野忠徳、英語前置詞 IN の意味分析、弘前大学教育学部紀要、査読無、110号、2013、107-116

掲載が確定しているもの(2件)

奥野忠徳、英語前置詞 AT は何を意味するのか?、中島平三教授退職記念刊行物』(『不思議に満ちた言葉の世界』(仮題) 査読無、2017年度公刊予定)

奥野忠徳、英語前置詞 T0 の意味について、『仁科弘之教授退職記念論集：言語を巡る六つの章』、査読無、2017年3月刊行予定(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥野 忠徳 (OKUNO Tadanori)
弘前大学・教育学部・教授
研究者番号：80125517

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：